

## 『日本英語教育史研究』 投稿規程

1. 投稿資格は、入会后1年を経過した会員とする。ただし、編集委員会の依頼による特別寄稿についてはこの限りではない。
2. 投稿論文は日本英語教育史の研究に資する内容のもので、未発表の論文であることが求められる。ただし、すでに口頭で発表し、その旨を明記している場合は、他誌等に投稿中でないことを条件に、審査の対象となる。
3. 各号に投稿できるのは、共著の場合を含め、ひとり2本までとする。ただし、そのうち第一著者となれるのは1本に限られる。
4. 過去に『日本英語教育史研究』に論文（研究ノートを含む。）が掲載されたことのない会員は、論文投稿を前提に、事前指導を2回まで受けることができる。その場合、草稿（途中段階も可）を8月10日までに日本英語教育史学会紀要編集委員会に提出する。投稿論文提出時には、事前指導を踏まえていかなる改訂を行ったかを明示した別紙を論文と共に提出することとする。
5. 投稿論文の分量は、キーワード、英文アブストラクト、図表等を含めて『日本英語教育史研究』の完成ページ（38字×28行）で20ページ以内とする。これを超過することが認められることもあるが、その場合も30ページを超えることはできない。また、20ページを超える場合には、分量に応じて別途、印刷経費を自己負担するものとする。
6. 投稿論文の提出は、原則として、プリントアウト原稿を正副3部提出するものとし、正本1部には著者名を明記し、副本2部には著者名を伏せるものとする。

提出は郵送もしくは託送によるものとし、原稿とあわせ、受領確認用の宛て先明記の葉書を1枚同封することが求められる。
7. 投稿締切りは、毎年10月31日とし、この日およびそれ以前の消印もしくは受付印を有効とする。これに遅れた場合には、受理が拒否される。
8. 投稿論文は、論文審査委員会の審査を経て、掲載の可否、および、論文、研究ノート、調査報告、その他との種別が決定され、著者に通知される。

9. 掲載が認められた場合には、審査委員会による指摘等を踏まえて完成原稿を作成し、指定の期限内にプリントアウト原稿ならびに電子媒体によるファイルを提出するものとする。その際に、すべての審査コメントに対する対応や修正事項を明記した別紙を添付する。審査コメントと無関係の追記等は原則として認めない。
10. 著者による校正は2回とし、変更は字句の修正のみとする。内容を改めた場合には別論文とみなされ、掲載が拒否される。
11. 抜刷りは30部を学会経費によって作成し、著者（共著の場合は第一著者）に対して無償で提供される。これを超えて抜刷りを希望する場合には実費負担とする。
12. 掲載された論文等の著作権は著者に帰属するが、著作権のうち複製権および公衆送信権の行使については日本英語教育史学会に委託される。
13. 『日本英語教育史研究』に掲載された論文等を他書・他誌に転載する場合には、転載先書名（予定可）・誌名、発行者等の情報を添え、表題を改める場合にはその旨を明らかにして、書面による転載許可願（書式任意）を編集委員会宛てに提出し、その許可を得るものとする。また、転載にあたっては、初出が『日本英語教育史研究』であることを明記し、号数、発行年を記すこととする。
14. 『日本英語教育史研究』に掲載された論文等を機関リポジトリを通じて公開する場合には、書面によって編集委員会に通知するものとする。

付則 本投稿規程の改正は、理事会の議決により、会員総会に報告するものとする。

# 『日本英語教育史研究』 投稿論文標準書式

投稿論文はワープロソフトを用いて、次の書式によって作成し、提出するものとする。

1. 用紙はA4判を用いる。余白は上下左右とも30ミリとする。
2. 本文の文字のサイズは12ポイントとし、1行あたり、和文の場合は38文字、英文の場合は76文字、いずれも1ページ28行とする。注、参考文献の文字サイズは、10.5ポイントとする。なお、英字・数字はすべて半角文字とする。
3. フォントは、和文は明朝体、英文はCenturyを用いる。
4. 和文のタイトルに副題を付す場合は、主題の後に全角コロンを付ける。
5. 和文の場合、句点は「。」(マル)、読点は「,」(コンマ)を用い、句読点やカッコは全角文字とする。
6. 見出しは、和文・英文ともゴシック体を用い、その前後に1行の空白を設ける。
7. 第1ページは以下の順とする。①論文題目、②論文題目の英訳または和訳、③執筆者名とそのローマ字表記(例 TAKENAKA, Tatsunori)、④日本語または英語のキーワード3語、⑤100~150語の英文アブストラクト、⑥本文  
なお、正本1部にのみ、冒頭8行の範囲に著者名を記すこととする。
8. 提出原稿にはページを付すこと。
9. 引用方法、注、および参考文献の記載は、次の例を参考にすること。

## 引用方法

- (1) 参照した文献に言及する場合、文中に「著者名(出版年)」もしくは文末に「(著者名, 出版年)」のいずれかの形で示す。

例1) 神保(1911)は、独案内を含む独習書を好意的に捉えた。

例2) 刊行された訳注書は160点以上を数え、1887年がピークという(江利川, 2000)。

- (2) 文献の記述の一部を直接引用するときには、「」で囲み、直後に括弧を用いて引用ページを添える。引用が4行を超える場合は、「」を用いず、別行とする。

引用を導入する文に著者名（出版年）を記していない場合は、引用の末尾に著者名、出版年、引用ページを添える。

例 1) 岡倉（1911）は「最初の洋学研究者が、漢文の学び方を踏襲した為、今日まで餘弊風を為して、是より他に解釈の方法は無いと思はれるに至つたのは、嘆ずべくもあり、亦憫笑すべきことでもある」（p.121）と述べている。

例 2) 「英語の各単語に訓を施して、返り点によって語順を示す訓点本」（森岡, 1999, p.108）と説明されることもあり、しばしば「虎の巻」と呼ばれる。

例 3) この点は竹原（1934）に次のように記されている。

既成四十有余の基本語表を蒐集し、これが比較研究をなした結果、これらの諸表を合併して一種の総合基本語表を作成し、これが公刊を企図したのである。たまたま昭和七年海外出張を命ぜられた際米国においてソーンダイク博士の改訂基本語表を見るに及び、この改訂版において私の目的がある程度まで果たされていることをさとり、同博士及び同書の出版元たるコロンビア大学出版部の許可を得てその日本版を発行するに至つたのである。（pp.3-4）

## 注

注を加える場合は、本文中の該当箇所にも右肩数字を付ける。なお、脚注、尾注、いずれも可とする。

例：本文)

森が発音表記においてより正確を期したのは、この本を手にする生徒が声に出して読めるようになり、また、それを聴いて書き取れるようになるためではなかったか。タイトルに「正則」と付けた理由もそこにあるかもしれない<sup>6)</sup>。

例：注)

6) 惣郷（1970）は独案内のタイトルについて、「正則とあるのは発音を正則にしたといういみ」（p.328）と述べている。森のものを含め、タイトルに「正則」を冠した独案内は多い。

## 参考文献

論文の末尾に載せる「参考文献リスト」は、原則として本文中で引用・参照された文献とし、掲載順序は和洋の文献を区別せず、著者の姓のアルファベット順に配列する。

### (ア) 単行本の場合

小篠敏明 (1995). 『Harold E. Palmer の英語教授法に関する研究：日本における展開を中心として』  
第一学習社.

Swinton, W. (1880). *Studies in English Literature*. New York: American Book Company.

### (イ) 紀要等の論文の場合

青木庸效 (1991). 『『高等科英語』とその周辺』『日本英語教育史研究』6, 283-287.

Nassaji, H. (2003). L2 Vocabulary Learning from Context: Strategies, Knowledge Sources, and Their Relationship with Success in L2 Lexical Inferencing. *TESOL Quarterly*, 37, 645-670.

### (ウ) 単行本の中の論文の場合

大門正克 (1993). 「農村から都市へ：青少年の移動と『苦学』『独学』」成田龍一（編）『近代日本の軌跡9 都市と民衆』吉川弘文館, 174-195.

Swain, M. (1998). Focus on Form through Conscious Reflection. In Doughty, C. & Williams, J. (Eds.), *Focus on Form in Classroom Second Language*. Cambridge: Cambridge University Press, 64-81.

### (エ) 筆者が複数の場合

Gardner, R. C., & Lambert, W. E. (1972). *Attitude and Motivation in Second Language Learning*. Rowley, Mass: Newbury House.

高梨健吉・大村喜吉 (1975). 『日本の英語教育史』大修館書店.

### (オ) 同じ著者による同発行年の文献の場合

Palmer, H. E. (1936a). The History and Present State of the Movement towards Vocabulary Control. *I.R.E.T. Bulletin*, 120, 14-17.

Palmer, H. E. (1936b). The Art of Vocabulary Lay-out. *I.R.E.T. Bulletin*, 121, 1-8.

高梨健吉 (1985a). 『文明開化の英語』中央公論社.

高梨健吉 (1985b). 『英語の先生、昔と今：その情熱の先駆者たち』日本図書ライブ.

(カ) インターネットからの引用の場合

外国語教育史料デジタル画像データベース作成委員会 (2003). 「明治以降外国語教育史料デジタル画像データベース」(平成 18 年度科学研究費助成研究) 外国語教育史料デジタル画像データベース作成委員会. 2010 年 4 月 20 日検索. <http://www.wakayama-u.ac.jp/~erikawa/database2/>

Smith, R. C. (1999). *The Writings of Harold E. Palmer: An Overview*. Tokyo: Hon-no-Tomosha. Retrieved August 18, 2010. <http://www.warwick.ac.uk/~elsdr/WritingsofH.E.Palmer.pdf>

(キ) 口頭発表ハンドアウトの場合

Anderson, V. (1991). *Training Teachers to Foster Active Reading Strategies in Reading-Disabled Adolescents*. Paper Presented at the Annual Meeting of the American Educational Research Association, Chicago. (1991, April).

江利川春雄 (2009). 「英語通信教育の歴史(3): 欧文社通信添削会を中心に」日本英語教育史学会第 225 回月例研究会口頭発表ハンドアウト (2009 年 11 月).

(ク) 原典とともに翻訳も参照した場合

Ichioaka, Y. (1988). *The Issei: The World of the First Generation Japanese Immigrants, 1885-1924*. New York: Free Press. [富田虎男・糸井輝子・篠田左多江 (訳) (1992). 『一世: 黎明期アメリカ移民の物語り』刀水書房.]

(翻訳のみを参照した場合)

イチオカ, ユウジ (富田虎男・糸井輝子・篠田左多江 訳) (1992). 『一世: 黎明期アメリカ移民の物語り』刀水書房.